

2019年度春学期 研究者交流支援制度招聘プログラム 実施報告書

研究知財戦略機構 黒耀石研究センター

特任教授 栗島 義明

招聘者： 林 尚澤 教授

所属機関：大韓民国 釜山大学校 考古学科

(Lim Sangtaek Pusan National University)

講演：「韓半島新石器時代集落の展開と生業の変化」

開催日：2019年7月28日（日）

場所：明治大学グローバルホール（グローバルホール1F）

使用言語：韓国語と通訳（日本語） 講演・質疑とも

2019年度春学期における研究者交流支援制度招聘プログラムの助成を受け、大韓民国釜山大学校考古学科の林 尚澤教授を招聘した。招聘期間は2019年の7月22日から29日の8日間であり28日に表記講演をお願いし、併せてシンポジウムを開催して研究者を交えた意見交換の場を設けた。

さて、日本列島の先史時代研究は地域的な特徴が顕著であり、地域独自の文化変化やそれに伴う生活用具の組み合わせについての研究に主眼がおかれ、周辺地域との比較研究については積極的に論じられることがなかった。とりわけ縄文（新石器）時代の考古学的研究にあっては東日本、わけでも関東・中部地方に研究が集中していることも関係し、当該地域と他地域との比較研究のレベルに留まることが多かった。だが、北海道や九州など弧状に展開する日本列島の端部に位置する地域では、先史時代に於いても恒常的に大陸側との文化的な影響関係を保持していたことが古くから指摘されてきた。しかし、個別的な遺物の形態・製作技術等の類似については比較されることはあっても集落や墓、道具などを含めた残された考古学遺物・遺構が比較研究の土俵に上がることは稀であったと言わざるを得ない。今回の林先生のそうした従来の比較研究を大きく前進する為の好機となったと言える。

韓国に於ける考古学は原三国時代～三国時代（青銅器・鉄器時代）が遺跡・遺物も豊富なことから厚い研究者層が形成されている。それ以前の新石器時代研究については専門とする研究者も決して多くはなく、また研究成果が日本の考古学者にまで伝わる機会も少ない。加えて研究方法の相違もあって、韓半島地域では集落研究や生業・墓制研究などが積極的に取り組まれることもすくなかった。そうしたなかで今回、林先生はご自身の研究成果をまとめるかたちで韓半島地域の新石器時代を通じた集落や墓制、出土した石器や土器などの生活用具などを総合的に捉える、極めてオーソドックスな研究手法に則りつつも、最新の欧米での研究動向である生態学的手法や経済的な観点からの先史社会の姿を復元された。また、

今回は特に韓半島の南部地域と九州地域との遺物群の比較研究を通じて、対馬海峡を介在させた恒常的な文化交流について言及されると共に、九州産の黒曜石の韓半島地域への流入や、逆に韓半島から九州地域へともたらされた可能性のたかい貝輪や土器文様の存在についても分りやすく言及された。講演会並びにシンポジウムには関東圏の研究者だけでなく、近畿圏の研究者も参加されたことから充実した雰囲気の中での国際交流となった。

なお林教授には講演に先立ち、先生からのご要望もあり日本列島の縄文時代集落から出土した典型的土器群、また遺跡についての案内をした。案内した遺跡、博物館は日本遺産関係事業他で明治大学黒曜石研究センターと事業共催等を進めている長野県の井戸尻考古館、茅野市尖石考古博物館、長和町黒曜石体験ミュージアム、北相木村栃原考古館などであった。特にセンター施設のある長和町では黒曜石の採掘坑調査が進められていたこともあり、遺跡調査現場を実際に見学するという機会にも恵まれた。韓国の新石器時代遺跡からは黒曜石を用いた石器類も出土するが、それらが国内では産出しない石材であることから日本（九州）や北朝鮮（沿海州地域）からの搬入品として捉えられている。今回、日本の縄文時代の集落や出土品を検討され、林教授も感激を新たにされていた。今後、林教授を中心とした釜山大学の明治大学の考古学的な国際交流事業を模索し、継続することで意見が一致した。

今回の招聘を可能にいただいた国際連携本部の皆様にお礼を申し上げます。また、資料見学他で多くの研究者にもお世話になりましたことを付記させていただきます。



記念講演会の様子



長和町の黒曜石採掘坑跡見学



北相木村の国指定史跡「栃原洞穴」の踏査風景（中央が林教授）

